理慶尼の記

一名武田勝頼滅亡之記

蒋塘題籤

完

リ伊5
916

916

理慶尼乃記

三可書屋珎蔵

三洋一篇
更成梓刻

蒋塘生題

序

宇治物語にならひ六志の追書にならへて今のまてをやしてを
きく小をくも数あまたなりとて田舎おほえのうはの世
くりわけあそては思ひやり龍をとのなまやもむくのかたかりの
語よふらひていひあるをえ云ふ佛のみたそ浮みらうつし心
ら然るなる残も作り出てくるくさきさひわれの世界譲るる
たくし語り出しる茶しうるくるを生けるさうる心ば君子る
尼のいそのこのみのひの國なしさりつる武田殿のしもと門
のこ娘我ふらるわのさとら残見のおあへ合て志るうしらく
めくつる名をしかさは宿のよいさかるぬしのせ猪るあやもこえ
あうちるるはるふあれ氣いそうめのるとまたのつくれおさその

猶よ人の心みちたぬところ安めむは志ののみにあらんハことによ
しは見情ありけハこの所にちやさき世乃みちにならひてける
ことさへら夜好こそりたるはあし言のよれ女房乃おとこの之人
えてう教を得人乃まさなき事ども是なりそれ所作ら前と
見なして それらの先をとりて使へき物語ふみ見きけせさのこ
としひ人乃心ならずやわかことにかしたまひ みやびしらぬもの心なし
うち暮りて あなのめ所につきかれおかくのことはたのつのら所る生
示わとは世乃中をおしはかむくく人々まハけ昼の色好ミの
ここらにあそこかのつらにおもしろく人てかへくらの主人教ぞ見あら
ずりしつらて 作出於迷堂にしおもむくの本すゑりて今

先ぞもとて去読めらむもせうに 己の条ぶらひてなどあかしさまる
辞よ弟子しさ師かりて 那らそなく物の本 此文のきめさて何
ら志情人の者れ見まねの えをしれ筆 花は情を思ぞ
人わら案るるやの まるのひまで以ぶ人のも引るはさて作るぶ
うらなる人かの花乃まこうら物をしらふさうしをぞ一そし我
あやなうてうほし えあるホおあるふかりて中て取るさこいし
らすはえんせしの心よまなしみけるに天保の いと物とい不便お
表さらなはえの卯月 田の為来のいつく

此あけこ殿(どの)こそふきしハ。てんき五年。みづのえのえ志。ゆぢ
やくいんれたいしのちれまいせんみん七十代乃御かどのさ
んときむつおくみさぶらうむね。はこれ十二年れいく
さなり。そのときれたい志やうぐんいよのかみより志ち
やく〳〵ハまん太郎(らう)二なんかも二郎二なん志んら三そらむ。の
みせたまひてほひはほろかしたまふかの東将ぐんにいふ
とうじこそふきしハおりて三ちやくよほうこゑ一百里さきのみ
るものなりか様あくどれそのうしなひたりふとく物孫
あいいふぢたまちわ志んら三それ浅ちやくしにて滴し
まそばあけこの太郎いこそふきあり。かつらりまで三十

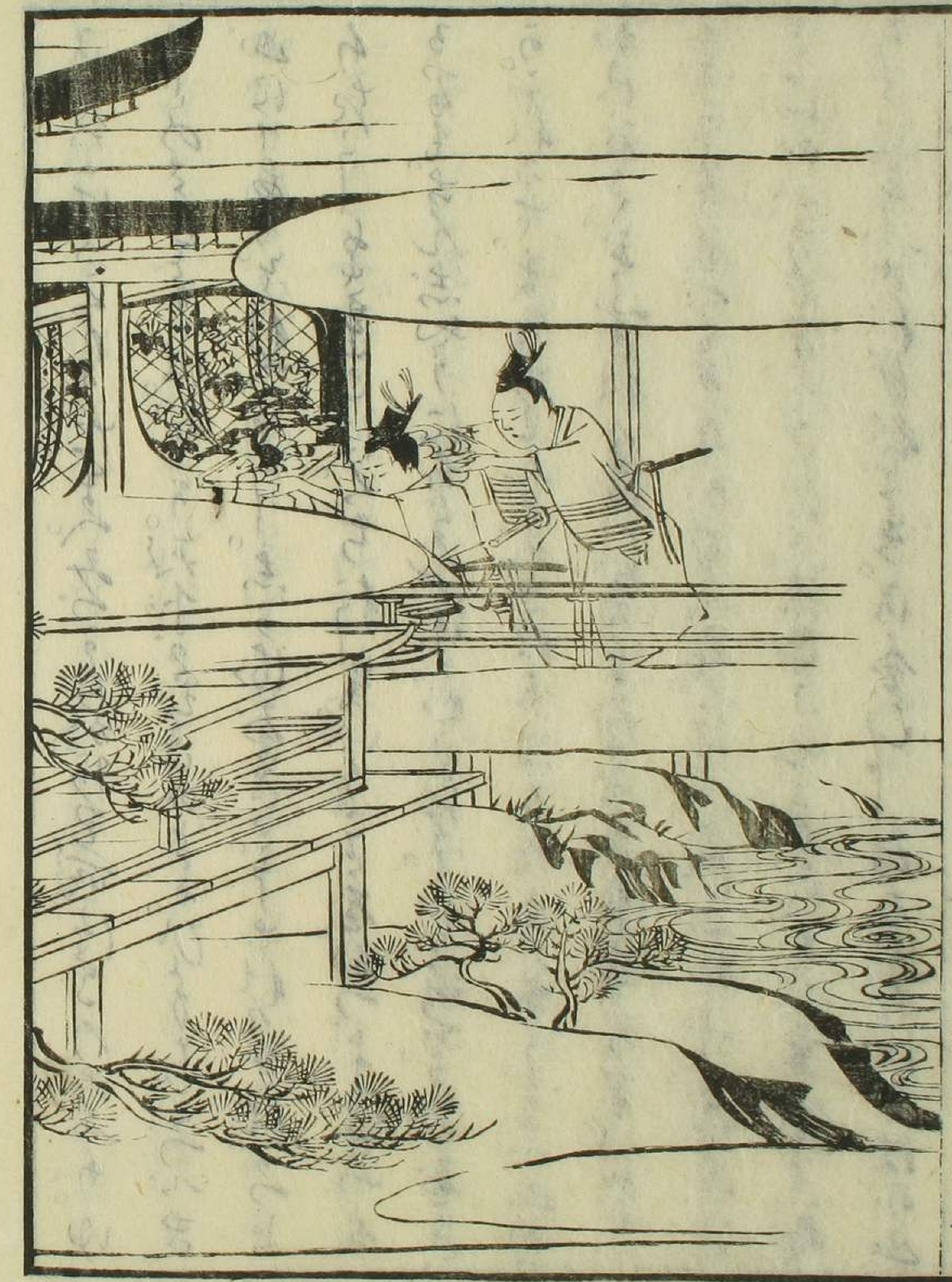
一代にてわつらひたまふところにしはらへけるにかや、思ひぐ
る錢きこえしむりちらたそう事まゝあくびばりつゝくい
いふことやさたの友あそびはせいやうのはしたまは花か
にも心をとゝみ、此ほとりをおしえこれは錢をころ一寄をよ
みちをつねとみなつまにけるばうけをはらに浪人すご
しきかくれことをうんまつのね乃いまひれうづすたちくりめ
ひくらちらそ見たをみなてのちをよせなきひさやけき月にさ
むこうびこゑにわかきん声やう乏ちつまさをほへたをひくみち
屋がをれそのそびをほまをとけかくしあらしてんふんそ屋
うごの物たまちやうはの跡あまあきかさからしうちすたる

てゆきれころふもなわしのばかりらんとさの。その尚とと
てきぐみちぎ思ふつきまるをさるまちれらしとなのみんた
そふさ殿ぞをかつよりハぬどうれこそ、わすれしはまちたう
ちふしたを神ふも、よ殿いれそでまくらどこれまさ勢たも
ふりもその事ともれみげんらうそふきつぬう南といとほるぞゆ
こ庵れうる思ふおもむきたまへ志のぶもこきうつりうんめ
いはまきてたえふにや、さそびのむはんれなまし。おもり
みくふぞらちかづさのうみれふたゞのへちう志さ海あいぐ。ゑや
このぜひをうしぐしきそびの名をさきらしてうつてくぐり天
五十年こゝづれ思うま三月十日にたの山名乃のつきんま。

うちはんたるふぞあられなり。御いたはしやな。むねなく
そ御うちれ人の。かたらんには。たとへ天下ぜいをもて御らそへ
ども十年の。そのうちハ。かなふまじ御ゆるし下さし。波のつよ
きとぞふせしは。心るべし。ちいさなれど人々はさぐまして。まし
ま勢ど我御内のさぶらい。たとへ重心かはりとおふされん
れぞ。ちから強きをよせたまるまでを。さきも心にてとあまくら
こ。さふめさをたまへ。くいぞかゝへ。そおちさ勢たまふ事まで。
御心をゆ見かども。御しまはざりしよあさにくふうど。お屋
まぢとぞふせし人。あいわにのうき人。ちかふさられ。ほいら
をぞれかつさんがはかりあとう。おふせはさかりそふらへども。

は勇を上げたまくりたまへ。みづからがゆかりの道の泥のふかゆ。ゆ
さらのさむとかは。おそろ天下のむきひとをひよもちとそつらさ。
山にてあのそれく。くろう。志の御覧やさんせれ。さば。つよ
わたらしめさまにはくちわず我いうこと屋かつよりせつな
る所もちん志やうにあらんほど。かくちやうし方をえんを屋き
の。これふてまちあらんとたきにはもちたるをあまりふよ小山田
かけ所くそふされし心はおろきなのらもふすあまりのち
をまをうけつの見をかならぬほふらひ小おふとはさうさき
く山小山田たまはぐ。法おふせたをふ事。ほどへあ
らじこそふされけれども。法事もじ。みなのりけさば小山

竹苞



韮崎

金銀珠玉

故府 新府

田なみぞとなつかしくおもほされけるを。御きんしやうは。さいはひに
しよぜいも。くんだいどまゐり。いまだはやくさらにうちたま
ぬなきぞ花は。わが君さまにこれぞや。けにといふ。かの
に。法心つよくも。おほまへにおゐて。いなきくだされかし
まことかつまりけるとおぼしめし。はるかにふらさまに成せさ
せたまふ。こゝろしやる。はなびいきろれるて。ちうつらせた
りふほうつぼれどき。いさぎよき。身のをちをとめたる
こゝろを。かりもかく。遠くおかりにて。御供は。それがしぞ
らず。ころもんふのそひ。三百ばかりにて。ことごとくふせぐ
ひつるさしはるうつらせたまふ比は。十二月廿四日たの

に。おく。ほたりて。三日ふるに。かくあるとき。たれもぬれて。はな
ごりおしみの。だいしめもとほしとをりこまやかに。なみ
ぶきれずしおしもかうきて。此所よりはいかに。御つき
よは。遊覧ほどもあしなさふきぼりかくあり。ひ
たやへられ。

うちつゝみは。いそぎかへりき。此所。
なぐさめぬる。まちのよろこびゆめ。
じあるて。まさきに。出させたまふとまつりて。をよ
おせたまりて。めしもかへぬ。はつるよめそれ。おさめ
あまりふぶのは。なさぶり。おしとぞ。おぼし。思す。きはいのよう

むしの人志かまこころ。恋ひしたまひけり。
そ海のあまんだち。いづれとぞ。ゆくらびす。
あらむかへして。みのはぎみそ経。
尾らひ三日なれそ。かま恋いじゆ～せたまふ。ぶんの人このの
志き。からさてきん恋られそ。かはよわきあんじめてよつき。
はむ予もちぬ。ばさしそよひて。のつまふ尾うふ。おどお
そなきめ藤ふぞ。ほれき尾う五のあ素に。為もぢやうな
んしといふ志ともの。こちこそ女人ようま海くじゆふも。
心はなれしまおらぬやかつよりもはとぞふれぬらまず
わきさきにと。お何しめし。法まもわうたに。御心なきの作け

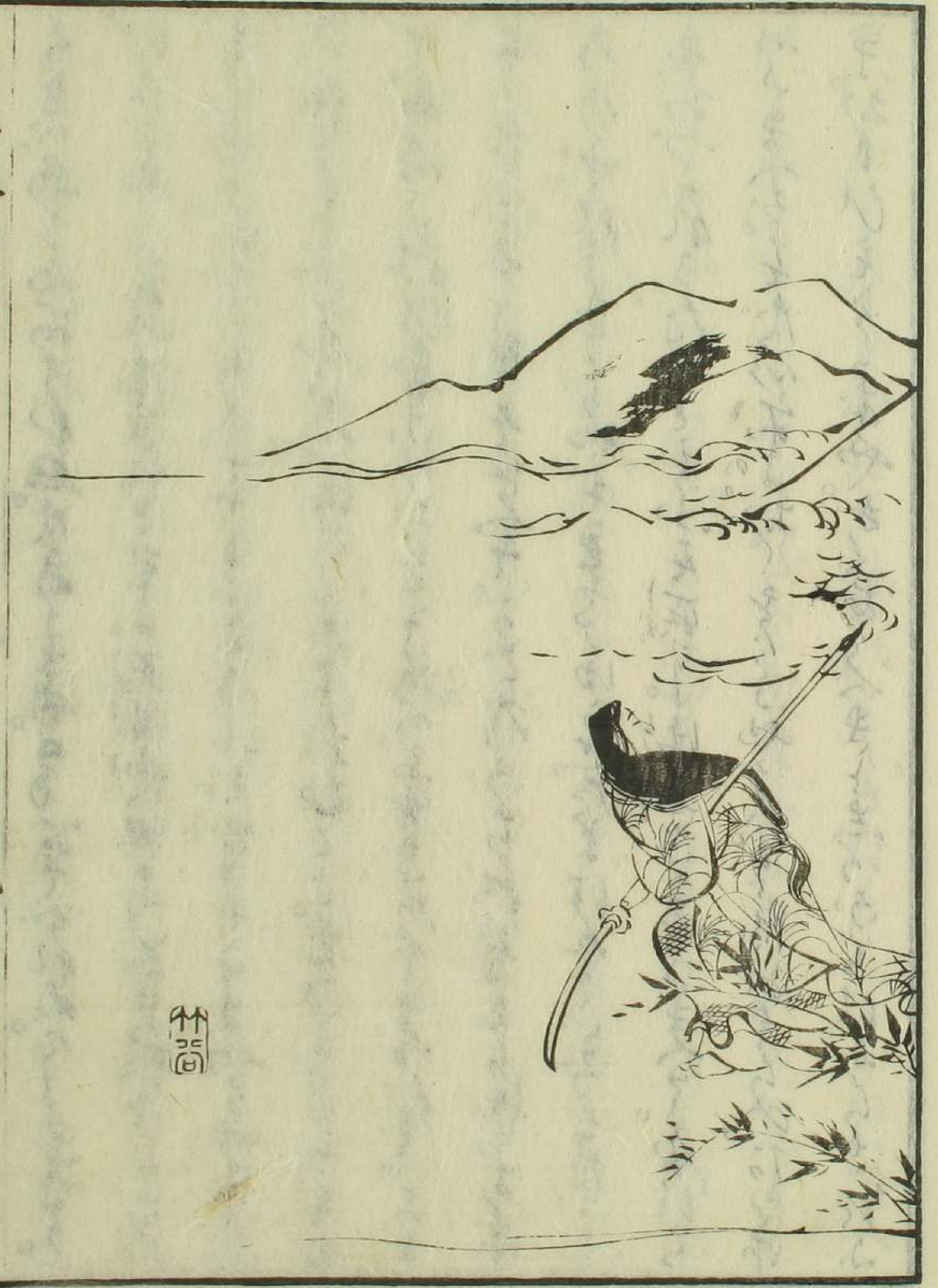
せしまひて。わちさをたまふ。みちにぐらむ。むりのしげん尾ひを
やうみ。おちいのしとやいも。ちれねのいのでまさるべきぞ。その
日もられぬるにぬりければ。稲尾とや所恋法もたのふ法をを
ゆらある。おふせたるやうは。ら此寺し法ほぞむは。尾くしによ
らいとうれたまわ海ちんやられはやし。みちのらをゆのら
おやとおもふぬりなを。尾くしるとかうにはよ経いこへづの
らさい。ごさですちこのはきぬ海とおぼつてあわみちろよ
ふるひこつきちきのうてふの恋しとれしたまへとがしわさ
さおらぞわまひのしるきば。とうぼうぢやう海をせこのに
を心づたまひて。かくこそ恋ひじかゆまへけるき。

ふしをいで。ひがしのはてに。はちのよせ。
おどかしわかれじ。たのむ法ほうし。
よそをながらいのちせ。こまる所とうちとけ。はなのじも。ぶ
らいゑふひをこうけて。心をよわがしけるふ。そのひのひかり
にただ御まことまし。めし。はきし人もさんしける。なるはも心
か御(イナシ)んけんのそれ。めめに。おのび。よ。おちゆきぬ。を。あ
まてかつようたれのあると。ゑくまへいでもと。はやハ法をまじ
さぶらものそれし。かさねて。いつのふと。みさきまへず。はちや。
あに。さうろうとそふ。夜だれがきはじめ。づねさもさまへバ
たきはいはのところよりんゑぞ。こんをそなんどもよりんゑ

おてともふしなれきいづきも。心ぼろりくや。れどかしめすも
ざふそのらもあへられバ。こまかういいとこの屋どへ出さる
たもふぶさはしやなの。にうぼうもち。きのふも。むすふる
まじをさへ。ようれ事と。おそそれをの。それむまへもお
ちゆきぬをば。かちやまでして。あよみけ御法ともん所法
らんじて。げふ。あそれみそ。れぼし見えて御どもその人もあるわ
げのれまさず。心ぼろく屋れぼしめしにら御じまで。かりきそ。
きん屋ま。たのみへにまき。
ゆくさきをたのみをうまき。いどし。
心よりみが。屋どをまたくの程。

とあそばし。なりひ四日にも。はたらふかくいみの屋どなりつま
たゞよふ小山田のかはまりておそれけるやうちがふ素だらくも
ふしばらうちこちふ。はしのこぼれへゆのぞやとおもひし
所にてきみへけるとやおちのられど。六日めくれのまさはたち
やうもなう志やらなきまし。ものれふはへ入てとかくさの涙のふくれ
すかのはうわうふり我らどのせん意はおもし志の涙づき
わかとおりたのみたてまつりけ。又はなしてきこえづのらきらみち
はやとまの子らさよふよたのみ入なのさとやつと我れおふせ
あらば浅まへはのりこしえ弟の所の涙のまさをたつ
らい。清きのひは歯いる屋しとやけれぞ。そのとうしはちや。

やむをえられけるふまさこしぬへし。いまもいたる。おばしめしけるきかも。
このものゝ心をさそはれじとたのし。めでたくもかくれとなりけれバ。母
もいとゞも。七日めよりは。涙ぎれゆまで。清きの心にまゐらせ。まま
ちさをまへいでもて涙にてえらぎりけれざことくすり清きのの
をさけられしかる所みせて。このそうで。はのまかる物のふのだん
どれく。姉やさぎはるのこふまへいまさりけれぞ。なはうら孫
かなり代よりしるふ。なのぞはこのつよりおさし見し。かのそのふ。
たかそのうけ。そのはなしさよくでんのあのさちふしげこ。
はそらくさのまへどこの。むきをとおしまゐら心のともれてらを
あへきて。たえぐんよ八のうさわきめちたるわれ心にふ。火をつ



くまバ。あるふぢのいわれ思ふ。情ありさゆめも忘てられぬなりけり。
げよまやうらんの女きなる事よ天目山へ遣むかはされ。ひとつ
もらずやよおぎりめし。すゞまらよ出ふを生させつむふ。らやちら
乃報どそらこらふく。活さしなまれむらど。思ひそよらまと
てあ清らみちひ居うくちぞそ語く。ふきぎたてまつれば。さく
この中ふ西に数をまへて。うごりうちれ急どこのや。あまる
ある乃中にふうをとのや。そきまゝゆ合せたよけんゝぞるまゝて
ふわづの所るたのとそふ氣派り。活馬かによせてまへて居にら
いらまへずぞただ影和よおくをたらきやうハ。の流み女らの。たのでは
まおもひそからぬおや。かくあるべきと思ふからはふらざるふ

ていのにもなる者を身分られまでぎたゆく。かぞねれう人
みくちぞしさよひ活なみぞとおみのりわふをなれぞ。かくよつと
きらしめしこけうらそ。さまつりおもひ活まで。このそめ了
たぞのられどや人我活こいうそうし去ど。れそ女清からさし
ゆへたのむおよはいのふとまのふまふかのつるれこふわにやふさ
うみちのき所おまば。いう村る風のめぐらわにも。活兵ふるけ
ときさのみへおくり。清から居を蔵方いのふそふらむとおもひしゆ
ゑなのむこれさまへ申みかの旅ならし矣こし去そらのれ流れ
ふせぎやたとへば人ゆうらしくて清まくふるけどさのみ
ゑおくれど我のゑらんるおもひきらな浅やぞよつきちまの

三界無安唯如火宅

うてなのゑんとおもひ染（そめ）る。むらさきのくもの上（うへ）までかは
らじとちぎりをむすぶはまのまつかぜ。あらしのおとは。むかしの理
をあはでしのちぎりをかきぬやとみえたまへば。のりのみちを
いはうしもおもふをたのみのみ。法師乃法の誨。すゝめ給ふよ
りかくしてつんさて清つかしてたゞこのたびこそとみくるし
じのおもかせなるや。あるそんにいはさくせんかいをあん。ゆゑみよ
くしたく又十方（じつぱう）くうどうさんぜかたぶんぐぶるあるとさだめ
ありたでそふぞうれ。あわむれ（し）なからみさまへば。清がん所（しよしん）に
こらしめ。法とたさやうふくきんあるとのたまへるかくこら
そゑいでたまへけれ。

野（の）ざれ乃露（つゆ）くさばのかゝに。きえてゆく。
たれにちらばこそたきぬ又
ゑんちんじのたまへば。かんじよりきたし。めし。よろこびてなる。
なげきなげきてまて。よろこびめしそふ所（ところ）へ人きたりてきゝは
やぜんくるうじあるまでまゐ（まいり）あるし申（まうし）されば。さらごみれ清すこの
はきごやにれしだたて清つりしに。清ぶらひあらう（ごう）けだ給ひて
かつらふさしめそめ。又清もあれぬさし。清ぶらい所（ところ）の清さこの
ぶ義を清子のぶゝのへけし給ふのぶゝのつれ清さかつきは
ちやよくぞさゝるゝ。それよりのちは心こゝれおもひせし。酒（ゆ）

もちのはなるはゝ。はなやとのみちかはゝに。しやくなるてなほ
しやうかう。かく清みたらの法あわせ清つたてまつれば。心を
のんめ給。きそそ土器でまつりそくらむまつかりなかかくなら
き孫ふはいのふら申に。清内此人ゝ此心がなりれら人なれば。
さてそはこなのれそ清仙屋おの世。あまふらんとあそほふ。
まづかいゝくまなりさそたらぶかし志るしを清めふのけ
んとてみつまかりしわのにむかつていうきるはなむ志ば。
いまこ屋う志やうれまば。人の清まふ志やあさみがゝし清さ
きこへつゝ越六いさうろちはこゝみてきろんまちなて清つれちく
そはこ蔵中屋きふし えむ えくふみてしあそせ祢んぶつ

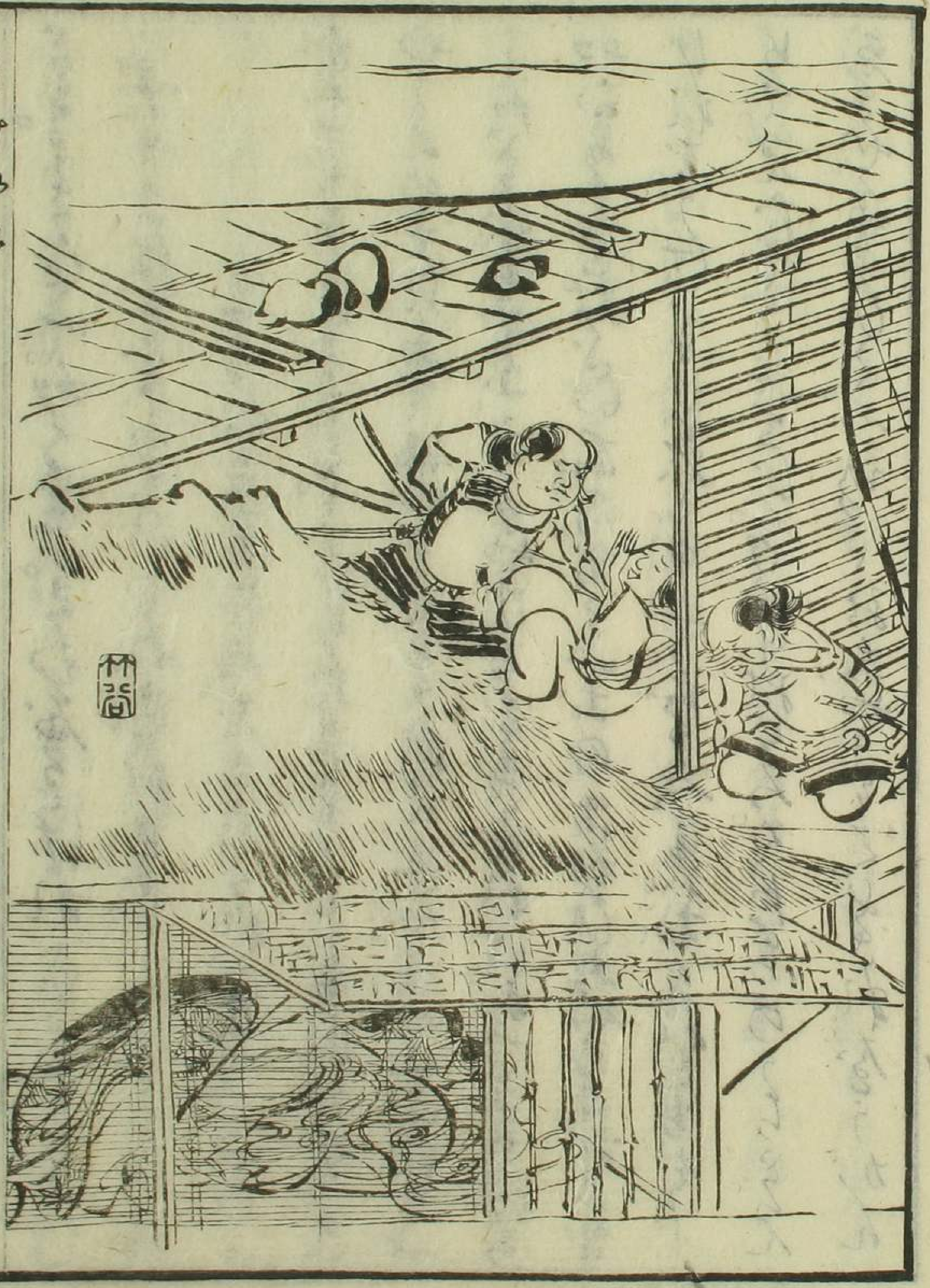
もふせといゝくにれ志ちてかの子なをはるあひだらけふすわる
いやてかやでみやうなうにれあらせ祢んぶつ三屋ん。そふし
まれまこしみかられ子ひんぬいく心ぞとふおしたてかへし
こ念ぞそとなでまつ清かつよの代よし清らん志てあまり
なへ入きるすれいゝしけるそのやさるごのてとばをもたけや
らはなりのきとれまして法るごふおなのごれたま人は清
まかなる人ゝ清でみれこそのくさわれねらしきる清がに
不代よしれきこしめしなふ法ちやがわするおこいしけるうあ
それなるとれたまつて清ぞてのめそらまねのきまたてなと
いてしけしるおきそたかりなる法そまぎ屋らなりて法ぶに

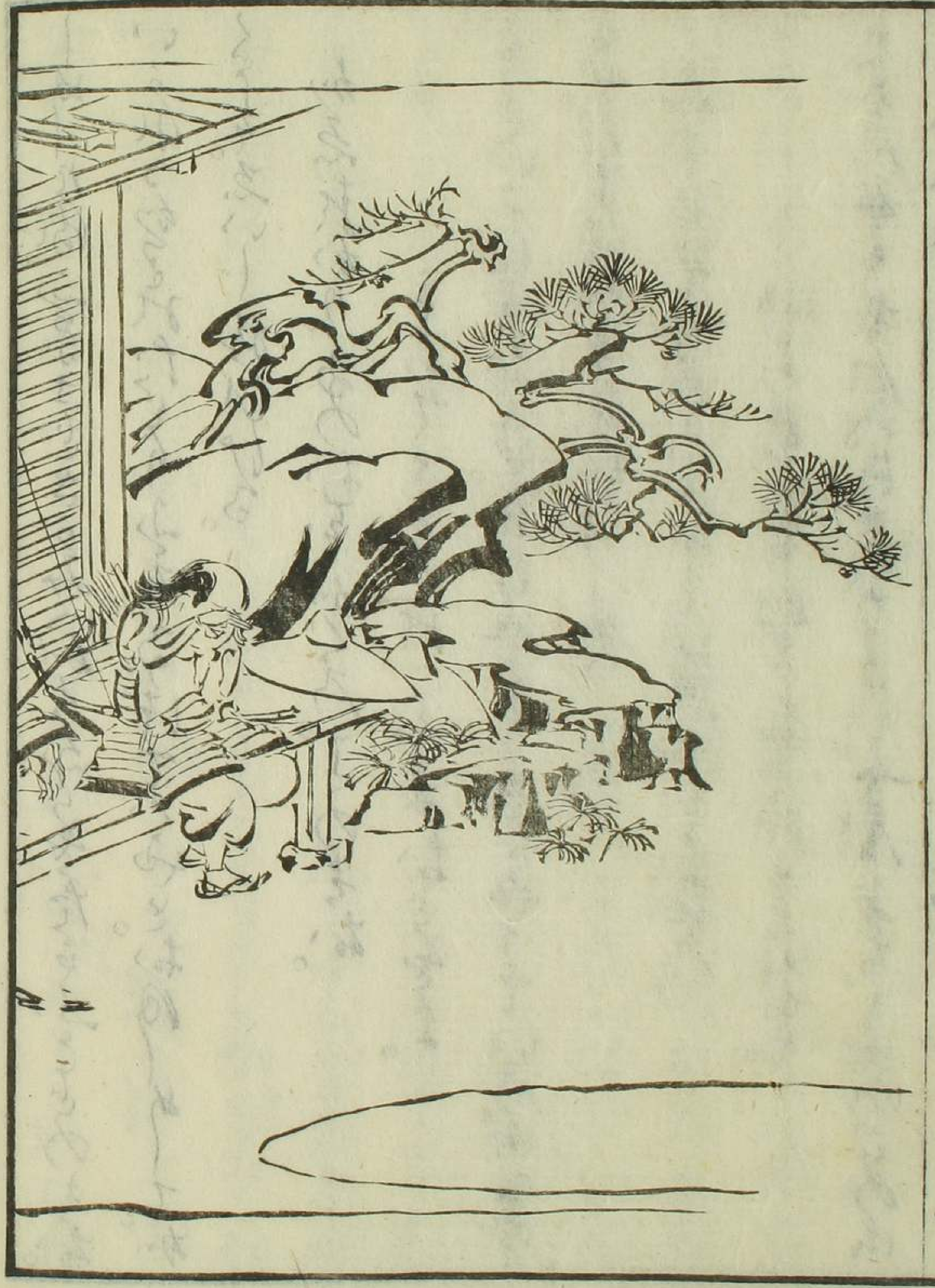
和おもふをける。かん諸乃母れ心のうちれ。ふびんさまと。のさ
まひく翁がことをいそげ。き、れうる急。おくりたまゐ
乃ちうちなくちう庵かな浦乃くまれ里ぞ
たまへ急み古乃たまさめいうき。
らそん庵りて。おくらせゑ人は女房わきは人なくて。いら
きりしが。浦急いふの餘よし。おうけ多事わざなう心ゐ。
たくちおし。三度いふだきなのみ御代ひまし。ふみて。ある
秘なりらちぽ之人し。事をむそ。かくうり急いふじ乃
いら躬け経。
かひゆらじ。はばめる花ぞ。さむぐちて。

むかしきゝしごろ乃たゝれうことぞ。
それうちはちや。女房にむかひて。いうける古翁が心も
ふびん二さむひふなりしをぞ。あんじふさらまゐるなり。いそか
る急。そはきゆよそ志家がらへて。いるならば。あまふもれ
しくち。いのよかるまれのたみともえ庵しと。いくにわば。女
房きゝのて。うたゝく乃人。私いふるや。いのわのに古翁。理浦
美ふ後てられし。又よになどのら急。むさふ。おもへで。おあじ道ふ
とおそふあり。とかさくらきうらみをわざ。つきや。かきねて。
いうようハ。おふなのわれあきとハ。これとのや。いの乃弟がら里
子ぞやうゆくしらて。あふのくはのうげぞ。ござせんはゆく

ぞくのちかうたる事ともなりぬれども。さらぶつやうちやう。
きぞかげれば。つまや。あれそしれひくらむきたちの付づて。
うは海道うハ。あのおふなお童子は出て。いづれ見る志
のびおきこ。あまふあふして。みづの様おくさのうたゞよさせ
よるめくけれぞかの男や事うこはくちをし哉おふさ
その角いづのへそゆまでぞ。いつれ道うたた渡屋さぞれ
もふてそらむきと。めしたれぞ。河のら馬よくらをおさ女
房おたきろもぞ。おそろひく男よるぞぐらとらを云のきむ
ずにむちおあで。十町ぞのりおい出しそで。かへりける其
後御ふ所渡せいごそちの付ぬれぞは心ぞそく艶お侭

しめし給ふ。家さとさのみへからあらそひたりけるとふとめのまたお。
いふれつかまれたりふそろるは出てだやとお侭しめしてお
くらそ志いじ路ひける。
かゝ志おかり。るのむそぞかくのてよの未お。
そちてさこうんれこふみおいぞよ。
まらいのにそちらせ路けんのち心きやうていの。御なぞ
うせたまはけん事おおだ侭し給ふ事
給りしたて。さそなおし御むむちろ花乃。
いろわ出ぬる君ぶれうくひそ。
とぞん事わきれバ。給まへなりし。女房あち。ませぶごの





いそやさんとて。かくれなき名をとりけれ
咲にほふはこのいそやもいらぬ花の里ぞ。
ちるにはそれもわかぬたるのかれのな。
かくて。てきはじめのくきらあたるよのしやきれば。ほんとき
やうあのまたゑてはつきてめされて。ほんしつのふにのそば
したゞふまでふはきやうゑたきたれば。かつらかはち
やおめきたきみ。ざい所の法さいさの法かひ志やくさおふぎ
けれどうけいまゐるれと申して御ま人あはなんれじもえじ
めそりたてきはるに御らしれこれたちのうちとらん
ゑませなきひとくれ給へばちやうそくめきれ屋うがん

びきいろなりけまは。むめのしれ屋うきひぞいおわひあさき
ち志やう天女さかさらそかほじなるめいめる飛ちハ御し
まさじい。ほく一はるまあたてまいらせんとあきわえて
いくりしふ御こづつらはまそわかくれおぬのせたまひ
てほくちふぬくやきめは御出でうけむきすふしたまふこの
つより此よしはらんじていそきたちより御このんやくお
あてきつるぞ。法志のひるいざさ法き志ぞしは。そのおもれる
まつ衣はちやきやうだいこ人そ法かそれ女房たちの。この
ひ志やくさるむく。ふいりしけるさんのみんぞしたありさめ
あて今ら御もかさいふけきどもむ。の御ひぢぐるむ

ねん。二月十五日に。たいけいもんゐんのごせき屋しきは。
十八万ぎ。ぎんじ。は。およそ二百よきにうちなもうきさをは
いしばはし子せん志ゆみまへたゞみこは志よあ志めび出ら、
よしどもその尚まへをそておふきをもは屋うはつきようかおくりん
たて落つるに屋くけいいづる日さく花なあげんじおいつ
おもちるもなり。よしともいのふくそならせたまらんれち
いの都るてんしやろの手にのらんそくちれしやよしと
我は手ふいのてきぬれからだやとおもひさいでの去やうぞ
くたてをりらわどおはをけれバらしいそそさらしねへし。い
志うそやけなせんしゆくなみづかうもさてそおもひは

まで。もじくだになをわたなげのし。おふをたるやくあるてよし
と我乃ゑんのもれかまでは。いづくにぞ。まさてさよ糸犯とめさるさ
は。こなみおもてのさんこのさくらのこゝろに志きからおし
きぜん志ゆれまへおうはしたてはつり。おふ揚にる屋うは露
子なれどもいつくしき都や。おそれなぐらもまんぐるへの山
のたいづくそのうげにきこれはいのでは落さるべきまたけなるひす
いのかんぜしまをあんぜいふくじともさしらきたまひておき
るせけるハなんじいの都る。いんぐるによしこともごのこととなりて。
うて流うきゑんおくんまるなおこらんどふハ。いの都る志づれおしいぐ
乃めのたいなにどやどる百よねんらうひをたちてとれ

さまへてでんくわうのうちにはるござおふらせたちふとみる
しものは花のなかにぜんしゆのはくびを前にぞおちたり
きる。よしともはくびをかぶせてはまして志ぎしこゝろわたくしふ
それより又げんまでやくぐわんねん二月七日一の谷のおちあひ
ろじこさ十八日にさぬきのやしまのおちたびにゆのぼりて
人うきをなきたちふしみのふせとぞ、たまゆふをもつて満げて
き寄うくかつ引清志のくまつのれためまんのこそむやうの
このそのつちやよつのらさうぞおもむすじさくとおもへども
てきまもちたまゝおもみなりみづのうたちおもふそゆか
いるふかむたるまなれど志よぞんのあきをこれならばく

ありしのちじどおりふなりとおはもとみればはじめやうけるま
わりゆきまちとまきえいりなりとてそれしまうまたはしごのぶこの
つまもてのうぜんあまて業ゆのうらをもいちゑいうちらくに志ゆん
志うつるとのなみぢもぎんを猿いかくふぶきひたちさればめけぐこ
の寄のまもなおもいろしてとかくれのことはやまひおもやるちら
のそろにこそあはれしてたふしふもまはたへつてのぶいじしむ
移んなりしのくまへあぞのぶのさざきしめふつきととろをせ
こまれくいやこれはかなしからぬなきふびあどゐのそうのをう
なかきうぐのせん移ん法つまくちぬさんそそのいわちつは
あのづうちゑいおなきこともかぞくこのたこらのあのし海
さけれど

ゑて。このくにそ。ものじたまひけれ。
まづきちゞる。華どもおしむな。おほくとも。

はなよりもはらしれ。さるのゆふぐれ。

とあそびしさいはひ。このはをかきすまし。かんげんまよはれたる。
なしやいふれる心ばへ。ひとなれ。おほえめし。いふ事。まいくるい
さ御なみだ。ふむをひたまひて。はるかんじの物がたりまいらせ
しておはしますに所にきたりけるは。いづれもうち物
ぬまそちていでやましきんじふたこのそ。まふ。はちやき
ゆうべい三人とおもひ。くたいのいられぬさき意うしなひて。ま
はい物おこらばくぼるゝしらあへばあしよするせんいはさ

経かれんではいおもていくわかれぞよきとぞこゝそにおぼしめせん
しいろ。ふつちを尾まよ。かおをすおもてはらめされ。霊しとおふせ
けきばうけいまわるゝにやまてはせ志がたてまつるはかり
こやくもふるものをせたまふてはぢちせひさおほしくてかく
さいふ意いじまはうおけれ。
おなじ涙あるる月を。おもひにくもその。すみ。

そわてゆくゑの。かしみやの。

あそびしかれば。はちやうとあへまてのくてさや糸らやけき。
おそこのだるのおもしきれきぬ月なれぞ

いづるもいるもおなじ山のは。

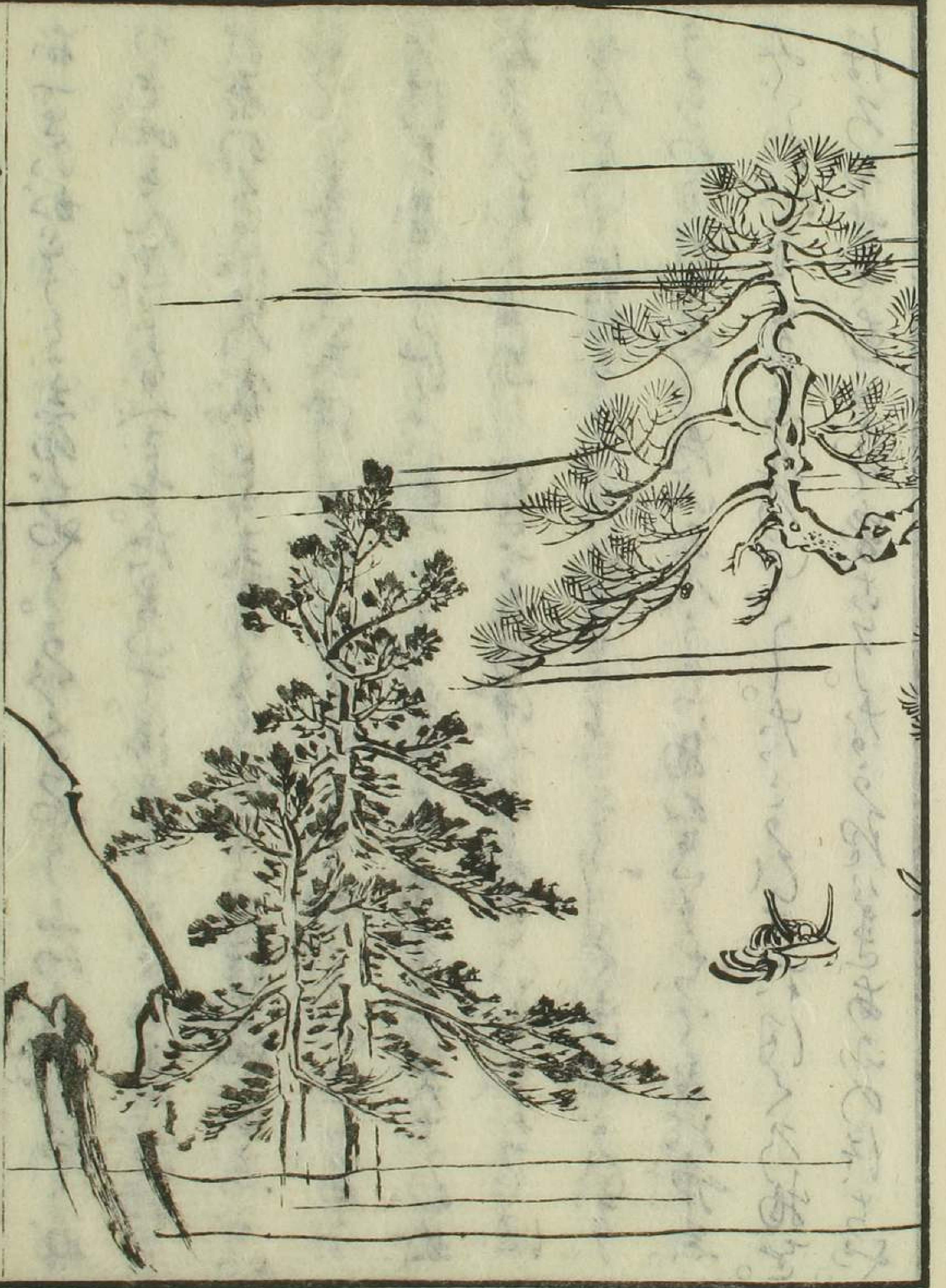
毎自作是念以何令衆生得入無上道即成就佛身

そのゝち。まいせゐん。のかうやうしゆぢやうどくにうむぢ
やうどうそくぢやうぶつしんとこれそんのこゝろなる。させ
ゆゑに以て法華三十七じやうにさ田野(この)は草葉(くさ)の露(つゆ)とき
えさせたまふ法ら尼ぬしこのふ以ふきつゞ屋のて法と
もやゑしとくふのくさみぞふしつゞけれ又のふ〱のれ
かいしやくふおいての法らやまいる。これをなれらせさま
ゑて法ちせいをおほしくてかくしそゑ〱じたまいきは。
あぶふ之をよめれをあらしのさくら妹(いな)
ときゝち流ほどさきるゝよれゆゑ。
おいらはらちやうけれまわりにさ以ゑぞかくてそゑ

願以此功徳普

いじ給ひきける。
蔓(ゆふ)ぐるゝほどをおくれて世(よ)野(の)中(なか)に。
いらしのさくらち流ゝのゝらじ。
じふやけるたらの法らやつんるて法つかいはよりそい
つらし人はまま執屋おくくまゆにうもげ志やういろ
くれさやうぞくは屋うまいとうかるのをふひらきこきわ
ねまふゆこたりづきのいるふせいたで武蔵野人(むさしのびと)とこゝゑ
さ給ひめ給うずてんかんの屋うがうをたのしくて雪(ゆき)
のきぶら急あらはきいぞこゑつきおたくやまさんとぞ
おもほへがきくて以めわしかくわんま志くじをぬまう

松田蔵書



梅蛙蔵書

及於一切我等與衆生皆倶成佛我人成佛

およ一さいがとうよしゆぢやう。かいぐぢやうぶつ。我人ぢやうぶつ

つと此きんをとなへさせたまいて。御年十六さいにて。おしく

れ候のくさば乃露ときえたまふ。かくのはちやはたしのい

よいよ太はうさ志ばしきゐいでけるところのやうのこちあふ

のはち屋いゝけるは。かのよりのぶのへはなさらぬせられぬ

おもひおくるかなし。いざてきの中へんがきいりうちじに

せんといゝければ。うけたまはるとて。そのしるく御志のひとり

うちわの乱手やうだい三人。うち物ぬきもちて。あれ亦ゑ

みだれいりくゐるへんのいくじしたこの日て。たけのく乃抽を

はろがせては(?)ふて。ちなるの理はきしあふのはちや。

いゝけれはそこにてそなたのちゝ人候さいごにてなすし。ひのまわりふし人

おうしないて。家がれのちゝ乃はぢみたる候し。いざけしちが

ゐて志なんおつとるそ志のはべしとて。あれ井太このはさぎ井

二三なん十九までさしちがへてぞうせふなり。波ちのごとれふ

るまいみえる人めおたい給のしむのしみそんくさんちやうつきや

う候うせふのいきおひよそきふさいのでまさるべきさ。かう

ちとうさんこ。此親のるすなる候し。よそひとりふし志

よりてむといふおしはぬ人がなのわけは其後あのほとり

けほらわふ志のびいりく。はさんのよしうけとまわり

なたきこのれしもあるはまじとるへんかなしあらねども。

じやうだいのみかどなるはさん。がびらゐこくそんしやうもふ
にうられ御ようめつのきさらぎ十九にいはでし十二ら
うんこの人しみ十二ねんげふものとうるいちくるいうぢ
やう。ひぢやうのさぐひまでおたきかなしむすこねそいの
ぐ満てる人きもくは。おそひたてまつれども。ふのうちにみな
てきれさだうれぬおのねて。法をみなうろ人ちなりの好し
こゝに一やの法屋じお弟らをしものゝ人念志のむくは
う恵ゆまてあまます御ゆきしくおもひよら黙兇
うがう音をよみあて法つる。
なお竹の花やしれ花ものゝそなちれば。

世をうぐひすの雅をつれきぬる。

むらさきの雲井の月のだいりしより
ひそ屋の野にふぞ満ち之教。

あはれなわなり明けならぞうき雲野。

うくれば歳よいざよいの月。

みなそこの花はさてまかわ竹林。

世にみこりある事ぞこの珍しき。

たれゆきてとらぬ法をかのあきこそ

うらうんやふの式この胜くるはら

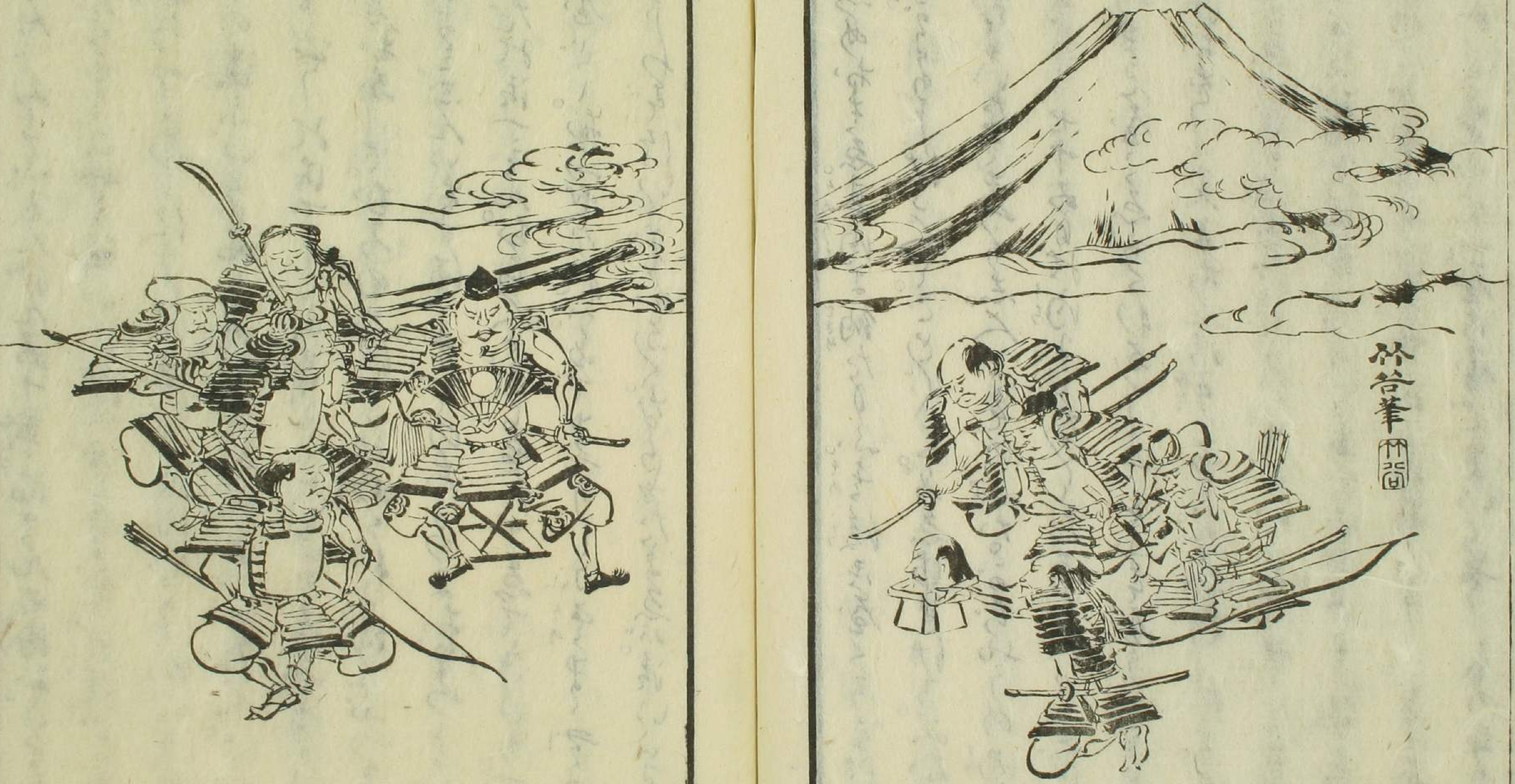
ぬわりぬ佐とてたぐひわむあらゐし

田野にも山辺のいけのした道。
花もみな。いけるものなるかおもいれまし。
よく／＼見ればくちばならぬはら。
此めうかうたのこゝろは。竹はやしとは。いけだの池
おやこは母なる花とは池坊のちるまでのくせをせ
まゝの事みなくとは。池一りんのるすなり。又そしになれ
竹野ども人にしおしく。しまいてぞふせどもおふ花木まなお
花いけよしとゆふるなかしまものくさ。のみならよりうどひは
とゆふるをそれにはなてぞ世の世かうきてゆふるすなり。又
竹けのよなるべし。いづれも花の其出来ずくある毎しき

後たきどうきかつよりさまのはくびおもちてのぶなのが花
へまおりけれど。花志すしにむかしの事へくいれくろ事。
そふはせにきば。活さふあるをとやおぼしめまし。ねとそれ
そむた活うし語へむしの花をたすふ。此ぶなのちやうのいけど
の此ならしおみをてまつりおふせ花を至うハ法にらうくふそは
なりゆみいりはならびをそ人おしのくし又家のくならんぞ
志わぬ花わ活きらはをたまへそのちやうには今度心のわ
花のあうける人くおらんなりしなそんとそふ花を法されば法
まゐるくも世にまふのぶなのちやうは明どのとおくをら活
至らハむ。のしよりともらし法ね活ふあいよ花わふ志伊

うれひで平家のみだれぞもちとや所に住せじとおもひそはじ
めは所々のまくらよみもおもしろしありしとききよりと
ころの法ら経みおりきたまいてそのふみおくちみうちふお
さめんぬのちめ仏生なる法ぬのいれいのまふせみざうらがはらお
けるにくびおきしいれ法華のうたに火おかけて焼きりし
ふほのおしつまりければこのまくらの人々みずれ入道に告
るしおしむちかふてよし法ねの首くびお身付てそ法つま
きやう重う中けんときうけ重よびのさんとまへば法くち外
内よりは法のふみおふき出しいざたまふとありそれよりのちそ
これまでまし法主なりとてお入まいりさ七間に間の浅さ七

るふ志めおもき其内に納たまふそ後法華くるしくはでい
く法心のなやみけるる人々ことごとく御仏生けるみおかりり
よ理をのいたそまつる志人々そのぶたいのちやうの御殿と
そじめさし七十五日は内にきなくたてられ給ばさの
るあつまりん重々このくわなくしてそふ土そ尾うとうとの
虎はけおきし美をおんれ行ききはたやおれまとこそふ
またとるのほどの代にあけばこそのは御めいのうちせしの系く
天下に法るおひろめかふびひにあだけそぬまふ物かたなりし
そふさぬ人ぶなものりけるそこのよのあらましちきあつめ
志おはかしるをふく一重法華どまいらせしものあわ世


竹谷筆
竹谷

おくらんじみるに。かんげん五十年。法てんの内。おさなふ程
ばでんくるうちやう語い。しれ火。ゆゑんまかりしろしれ。ごとくな
るふ世のゆくゝに。うちまよい。しる恩のやうじ。おいゝのぎん。
まするの道ふ。いらぞやと思いそれ。法心つきさ人。けいしや
うともふ世しれ。法でしとなすりそていきわもきみ法染乃ゝ語
ゑりふ為おかして。むろのどぼろ玆明くれよ。称んぶつゆさ
やうおよこ志んいおすほしてそのあかつまおまつとおらます。
あけだれ法一そんおち人と。ふらをたま為て。きうるゆ一夜
の法屋じらし。おふ世たれバ。あてまつりしふ其まよ出さ
を学わすぞ。法いよきかなくならをたま為バ。法いくさ

るかぎりなし。いとせめて。はなぞかりおもいとどあんまりきくさ
きの露みき思ぬまのこまれしずうえまもみて。そてまつらずやと。
おもひてかくしるし。おきまいらせるとこのやけまのめう
がうふかよみくたてはつかしこその。あまなり。
甲州栢尾山野つまけひひぐらし。
けひしるもあんこれおあへつむ。

されば後のよまでしのびてみ。つらくてかつせば。いとゞ心くるしく心のやる
かたのなくなくかの滝どころにはいゝ。あるふもあはれなりけるき
ださゆのりおもし。まいらせ。いまはさかりのふるゝまいりき。
なくさむこゝろとならんのこゝろおかのかふのうち。あのしは
ともおぼえて。つかなる。いおりおもきびうちにもあらねばの
みのおもいあみ戸のあくれに。たてゝうきことのえ。おもい
まるらせて。いかなかれを。さやうなるてをおもひまるともきれども。
かんをせさばくれたりひもつきうにして。いつきもその
よりなのわりにもぞ。とてこそかくおもふにてかなきさらけま
ば。ちかく。ひとつは心のみちなるも。まいらせやとゆふまゐこ

ぶのさきだちぬ。人のこゝろきりのまゝに。あふ人にまけたる
あらじ。ひら玉の年ならぬゝなるはかなそこ花のさかりも。
この世にあるすそなく。あらし吹くも。あまたはなぐさみぬる古
ろも。あらはれきそみのそうまし記のたなおひさまつる
ぬるよそい。いとでなのわき。ぎんこうさうせつれふゆのくさそ。ぬ
もちおかさぬるもなし。かくうすの形き。あわせ田をもち
ふる人あらねば。こゝろ人なし。かくていおりのあがりころもおや
ぬられぬこともゆさし。見とせのおもひいこのぜんそし
いまはやさはし。いゝでなのらるんうきえ日ふそるお
とめてもかでいばり有月日もくらんよふもなし。

だふやいのち茂さら露(つゆ)ぬきさゑなんゐお思(おもふ)をやたのみ
あるまのなみちれ（本ノママ）以下虫損

名は（本ノママ）かうやさんいんどういんへ

斯書一名武田勝頼滅亡記。理慶尼所記也。尼勝沼氏。
蓋武田一族也。父入道某叛於武田氏。永禄二年己
未十一月三日。山縣昌景伐誅之。先是。尼嫁雨宮某。
時尚有孕。然某以尼父謀叛。忌其連累。離婚遣
帰。尼遂依柏尾山慶紹阿闍梨。落髪為尼。築庵
居之。慶長十六年辛亥八月十七日寂。其所生子及
従者四人。家於山下。晨昏供養以終尼身。其子孫
今為存在焉。一曰久保田氏。一曰水上氏。一曰佐藤氏。一曰飯
室氏。所書原本。子孫家所伝。今為大善寺蔵。武田
氏之亡。尼在當時。以其耳目所親接者。録成冊子。一則蔵

諸柏尾山一名慈語高野山此所謂引導院名高埜山小坂
坊蓋志田氏香火寺也事詳見于聖通念集朱窗
謂其君臣上下當散沛流離之際即以和歌從容
除志其詞平坦和易觸口成章浩然若不動其心
也但其無一人不能和歌無一和歌不足又且可也
豈敢能賞出於一手者哉或疑之是皆后所撰
作亦不無謂無其理也丁酉正月善庵老人題

亾友横田汝圭遊歷到柏尾山寓大善寺二牢住持
覺隆法印出示此書且謂曰武田安藝守信満住木
賊原人稱木賊殿其孫五郎信朝移住勝沼稱勝沼
殿後薙髮入道號不山男女子三人長女即理慶尼
此也家亡之後入柏尾山為尼結桂樹庵居之男一稱
小次郎同父信朝自刃所死二稱圓三郎時尚勇其
匣負所追無知所終尼自書此記藏諸高野柏尾二
山所柏尾所藏本久已亾佚後得此書於都民源右
衛門家蓋當時稿本所侍女所筆也亦自足珍矣汝
圭嘗携此書詣高堅山與小坂坊所藏本校讎一過
無甚異同但此書卷尾所缺裂猶存數行云

善菴又誌

玉巖堂藏梓目録

東都兩國
横山町三丁目　和泉屋金右衛門

合刻四書　孝經學記　大學中庸　片山兼山先生點　全一冊

孟子正文　片山兼山先生點　全三冊

周易正文　同上　全二冊

禮記正文　同上　全五冊

周禮正文　同上　全三冊

論語考二編　宇士新先生著　全三冊
士新先生學問ノ該博ナルハ皆人ノ知ル所ナリ此書ハ經傳子史凡ソ論語ノ意ニ渉ルモノハ旁引曲証ソノ精詳ヲ極ム學者ノ考鏡ヲ資ケテ最モ裨益アルノ珍編ナリ

大學原解　錦城太田先生著　全三冊
先生經學ニ大功アルハ天下ノ驚服スル所ナリソノ經解數十部アリテ此書ハ其一ナリ古今諸注家ノ紕繆ヲ訂シテ先聖ノ秘蘊ヲ發明ス大學注解ノ書多シト云トモ此書ノ如キノ精確ナルハナシ學者ノ最モ貴重スヘキ書ナリ

中庸原解　同上　全六冊

三經談　晴軒太田先生著　全一冊
此書ハ論語孟子周易ノ疑義ヲ明ニ辨シテ學者講經ノ一助タラシム且錦城先生晩年ノ定説ヲモ記載シタレハ九經談ト相參考シテ最モ裨益アルノ書ナリ

論語一貫 片山兼山先生著 全五冊
先生ハ近古最一ノ考証家ニシテ清朝諸大家ノ影響アリ元禄享保ノ學ノ謬誤ヲ一洗シテ一家ノ學ヲナス儒者必讀ノ書ナリ

趙註孟子 善庵朝川先生校點 全四冊
後漢ノ趙岐臺卿ノ解スル處宋ノ程朱以前ニシテ別ニ見處アリ新注ヲ讀ム人マツコレヲ披覽セザルヘカラズ

皇清經解一斑 岡田煌亭先生校點 全六冊附總目
原本一千四百巻其要ヲ撫採シテ此編トス其精確ナルヿ古今解經ノ翹楚ト云ヘキ書ナリ

七經剳記 岡田煌亭先生著 全三冊
周易尚書詩經左傳孝經論語孟子首巻總目附

仁說三書 錦城太田先生著 全二冊
洙泗仁說一貫明義仁說要義ノ三書ヲ合刻スルモノ也先生數十年ノ精力ヲ窮メ發明スル處アリ此書ヲ著ス故ニ其說精詳確當ニシテ古今未發ノ秘蘊ヲ啓クト云ベシ附錄ニ論語ノ衍文誤守等ヲ考ヘ經傳同語異義等ノ數則ヲ舉示ス學者實ニ鴻寶トスベシ

疑問録 同上 全二冊
程朱ノ學ノ大意ハ聖人ニ詭ラザレドモマヽ其老佛ニ混雜スルモノハ道ヲ害スルニ近キアリ先生積年其似疑ナルモノヲ甄別シテ駁正セリ學者ニ大功アル書ニテ讀書家ニ必貯スベキ編ナリ

梧坡教諭 錦城先生附言 堯民先生著 全二冊
世教勸戒ノ意ヲ主トシテ旁ラ故事古書ヲ引テ證明シタレバ梧窓漫筆ニ類シテ又別ニ捷徑ヲ開キタル珍書ナリ

緇林年芳 近刻 全三冊
此書ハ世尊ノ降誕涅槃ヲ初トシテ和漢佛寺ノ始佛像ノ傳來或ハ經巻ノ翻譯佛法ノ奇異或ハ石動ノ佛圖澄ノ言ジ達摩ノ梁ノ武帝ニ見ヘ或ハ百濟ノ曇慧我朝ニ來リ空海ノ唐ニ入リ玄奘ノ西域ニ至リ日蓮ノ一宗ヲ弘ル等事實百般後漢ノ明帝ニ起リ我天保年間マデ千支ヲ符シ紀元ヲ掲ゲ和漢ノ書數十部ヲ以テ其下ニ抄錄シ悉ク小傳ヲ記載シタレバ和漢印度高僧ノ年數ヲ探リ履歷顛末ヲ索ルニ甚便利ノ書ナリ

西銘 附東銘 全一冊

朱子年譜略 全一紙

朱子訓子收 全一冊

梧窓漫筆 錦城太田先生著 全二冊
先生平日随筆剳記ノ書也古今治乱ノ本原ヲ推シ風俗汚隆ノ係ル所ヲ論ジ博ク經傳子史ヲ引テコレヲ証シ又學術ノ推正ヲ辨ジ天人ノ秘蘊ヲ漏ス實ニ天下有用ノ珍編ナリ

同後編 同上 全二冊
前編ニ漏レタル妙論ヲ載セ又經學詩文ノ流派ヲ辨別シテ其精確ヲ極ム前編ト同ク双璧ノ書ナリ

同三編 同上 全二冊
向者刊行スル前後編四冊盛ニ世ニ行ハレ刻板裝本日ニ給スル暇無ニ至ル今此三編ハ前後編ニ漏タル奇事瑰說ヲ緝合シ仍其外ニ舊聞ヲ溫メ古人未發ノ新得ヲ提示シ家庭ノ訓誨ハ勿論旁ラ博聞ノ資ケ詩文學習ノ秘訣ヲ揭ゲ都合六冊ヲ以テ全函ノ鴻寶トス

近代著述目録　横本　全五冊

此書ハ儒家詩人國學和歌有職故實兵家法律醫家易術陰陽五行神道釋氏ヨリ書畫茶道生花聞香狂歌俳諧話本雜技衆藝マデ慶長年間ヨリ天保ノ今ニ至ルマデ其道ニ名アル人ノ著述ヲ收載シ通編イロハ四十七音ヘ其姓氏ヲ排列セリイノ部ハ伊藤仁齋伊勢貞丈ト表シ其下ニ書目ヲ擧タリ近世目録ノ書頗ル多シトイヘドモ皆板行ヒル者ノミヲ載テ諸家ノ深秘稿本ヲ以テ世ニ孤行セル者ヲ記スルコトナシ此書ハ珍卷奇冊人ノ聞見ニ及バザル者ヲモ探索シテ遺スコトナシ只書目ヲ知ルノミナラズ諸家ノ姓名字號俗稱郷貫等ヲモ詳ニ附シタレバ其小傳ノ用ニ充ルニ足リ雲願ノ君子一本ヲ架上ニ貯ヘ一過讀セバ更ニ博識ノ助トナルベシ

同後編　同　近刻　全五冊

唐土歷代著述目録　横本　近刻　全廿冊

此書ハ初メニ天子御製ノ書目ヲ擧ゲ次ニ歷代名家ノ著述聖賢ノ經傳ヨリ諸子百家ノ書演義小説ノ類ニ至ルマデ悉ク收録シイロハ四十七音ヘ其姓氏ヲ配入シ前後新舊ノ次序ヲ分チ其下ニ書目ヲ擧ゲ索捜ニ便ナラシム讀書家一本ヲ貯ヘ披閲シテ多クノ利益ヲ得ベシ

朱子家訓經典餘師　齊田先生述　全一冊

此書ハ南宋ノ名儒朱子ガ其平生子弟ヲ導キ教ラレシ家訓ニテ人倫ノ道ヲ明ニシ五常ノ理ヲ述ラレシユヘ身ヲ脩メ家ヲ齊ル最一ノ書ナリ今國字ヲ以テ審ニ和解シタレバ士農工商共ニ解シ易シ是ヲ讀ミテソノ道理ヲ會得シテ一家ヲ導タレバ子孫長久繁茂スベキ基ナリ

甌北詩選　清趙翼先生著　大窪詩佛　岡部菊厓　兩先生閲　全二冊

詩學韵海　大典禪師著　全二冊

世ニ初學作詩ノ爲ニ設ルノ書多シトイヘドモ韵字ヲ用ユルノ例ヲ悉ク論ジタルモノナシ此書ハ韵字ノ下ニ解ヲナシ又唐ノ元稹白居易等ノ大家ノ集ヨリ長韵ノ詩ヲ格出シ古人ノ隻句ヲモ載セタレバ是ニ據テ其用例ヲ捜索セバ益アルヿ鮮ナカラズ

藝林摘葉　井良紀子綱著　全一冊

音義ノ訛舛ヲ訂正シテ初學讀書ノ資トス簡便有用ノ書ナリ

鳳鳴集　太田錦城先生著　全三冊

先生ノ詩集若干卷アリ此書ハ其七絶中殊ニ佳境ト称スル者ヲ集ム先生卓越ノオヲ以テ旁ラカヲ詩學ニ用ユ唐宋諸家ニ於テ窺ハザル処ナシ故ニ其比興深奥ニシテ世ノ詩家ノ作トハ大ニ其趣ヲ異ニス學者玩味シテソノ作意ノ妙ヲ知ルヘキナリ

甌北詩話　同上　天民　五山　兩先生校　全四冊

趙翼先生學問淹博近清諸家ノ巨擘ナリ此書唐宋元明清朝マデノ諸名家ノ詩ヲ評論シ及ビ其履歷顛末ヲ考究シテ精詳該博トス從前ノ詩話ト同日ニ論スベカラザルナリ

晩唐十家絶句　全二冊

杜牧　許渾　趙嘏　李群玉　温庭筠
薛能　皮日休　陸龜蒙　呉融　韋莊
右十家ノ七言絶句ヲ集ム

談鋒資鋭　堯民先生著　全二冊

此書ハ平日錦城先生ニ聞ク処及ビ後世隨筆中論ズル処ヲ劄記シテ學者博識ノ資トス又小説ノ奇事奇談等載タレバ大ニ看ル人ヲ悦バシム

客杭日記　元郭畀著　全一冊

龍背發秘 太田錦城先生著 荒井堯民先生校 全二冊

此書ハ家相ノ蘊奥ヲ著ハシテ衆人ノ為ニ福利ヲ導ク妙訣ナリ古ヨリ此類ノ書數種アリテ生尅旺衰ノ事ヲ載ルト雖モ元此事ハ易理ニ出テ聖人ノ人ニ教テ害ヲ避ケ利ニ就キ凶ヲ違テ吉ニ趣ク一端ナル事ヲ言ハズ今此編ハ専ラ漢土ニ云家相ノ周易ニ原ヅキ黄帝ノ宅經梁ノ簡文ノ竈經ナドノ秘ヲ採リタレバ古ヨリ傳ル家相ノ諸書ト互ニ發明スル処アリテ家相ノ理ヲ窮ムル必讀ノ書ナリ

頭書 **遊仙屈抄** 唐張文成作 學士伊時點 全五冊

此書ハ本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ此書ヲ以テ始祖トス嵯峨天皇ノ時學士伊時ナルモノ神仙ノ訣ヲ得テコレヲ解ストイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

幼々集成 清陳復正著 全十二冊

龍背師傳圖説 太田錦城先生直傳 堯民先生著 全三冊

此書ハ家造ノ形相地面ノ張欠等ヲ画圖ニ顕シ圖毎ニ口傳ヲ述テ住人ノ盛衰ノ元ヨリ妻子眷属ノ幸不幸親子ノ間ニ故障アル事片輪ナル子孫出生スル事下人等ニ不忠ナル者是アル事家ニ祟ル刀劍ヲ所持ナス事又ハ火難水難病難色難盗難等ニ至マデ眼前ニ知得ル妙訣ナリ一覧シテ其虚ナラザルヲ知玉フベシ

痘疹不求方論 全一冊

歴代名盤一覧 雉門先生著 全一折

丸散兼用方機 小本 全一冊

此書ハ東洞先生ノ作ニテ金匱傷寒ノ方ニ機變妙用アル事ヲ記セリ是先生常用ノ方劑ニテ臨病ノ機變活用ノ書ニツキタリ且丸散兼用ノ方ヲモ載タレバ大ニ幼學治療ノ益トナルベシ

先哲叢談 念齋原先生著 全八冊

此書ハ文禄慶長ノ際ヨリ享保元文ノ頃ニ至ルマデ名聲籍甚ノ碩儒聞人ノ列傳ニシテ其姓名字號俗稱生誕没故ノ年月日廸ヲ逸サズシルシ稗史野記及ビ口碑ニ存スル言行ノ奇談ヲ悉ク採摭シテ古人ニ面接シテ往事ヲ見ルガ如クナラシム其言行篤實アリ博覧アリ抗辯アリ矯俊アリ執拗アリ介僻アリ可貴可感可喜可驚可哀可笑ノ佳話甚多シ故ニ看官大ニトル時ハ修身齊家ノ模範トナスベク小ニトル時ハ温故知新ノ談柄トナシテ固陋寡聞ノ誚ヲ免ルヽノ術ニ此書ニヨラズシテ又何カアラム研學ノ君子一度巻ヲ開カバ終日手ヲ離ツ事ヲ得ザルホドノオモシロキ書ナリ

舊蹟紀聞 立綱法師著 全二冊

皇朝ノ事蹟ヲ考ヘ古語古書ヲ引證シテ國學ノ一助トス

近世名家書画談 雲烟子編次 全二冊

此書ハちかごろ書画鑒定の為に撰ミ[illegible]書画を學ぶ人[illegible]画論[illegible]流行の書画會展観會[illegible]文房に係り[illegible]落款印章書帖[illegible]推摩の[illegible]昔時大雅蕪村大年の諸先生[illegible]の書画にあやまりて[illegible]書画を好む諸君子座右清玩[illegible]実に忘れ[illegible]べし

譯解笑林廣記 遊戯主人纂輯 一噱道人譯解 全二冊

コレハ漢土ノオトシバナシニシテ面白キコトカギリナキ書ナリ俗語バカリニテ讀ガタキニ今和解註釋ヲ加ヘ誰ニテモヨメ安クナセリ且俗語小説ヲヨミ習ハントスルニハ漢土ノ人情ヲ知ラザレバ解スルヿ能ハズ此書ニハイカナルヿモ悉ク漏サズアル故ニヨク人情俗態ニ達スルニ妙ナリ故ニ俗語ヲヨム人ノ捷徑ニシテ闕ベカラザル書ナリ

開巻百笑 談洲樓焉馬大人評 全一冊

此書ハ焉馬大人の集る処奇く妙くたる今昔のおとしばなしにして老若男女共におかしみを催すかるくちおどけばなしなれども目を消し[illegible]の頤を解のくるしみひとも多く一奇出し実を見し開き見るに[illegible]笑を催し[illegible]何るの滑稽の人とも絶倒せしむるの事[illegible]開巻百笑と題するの處からざる[illegible]べし

笑戯自知録 伴田陳人著 全二冊

此書は心学をもとゝして[illegible]の秘術又ハ[illegible]と車のごとく[illegible]の傳ふ[illegible]一つとして天下一の宝とする[illegible]の戯術[illegible]を施して一時の解頤[illegible]面白きものなり

烹雜之記 曲亭主人著 全二冊

和漢の事蹟市井の俗説をとくに考へ又花の著書をも悉く雑志の足らざるを補ふれハ[illegible]精選の珍編なり

棟梁集 松屋主人著 全一冊

此書ハ[illegible]の[illegible]の[illegible]及び[illegible]の故実を外種々[illegible]して[illegible]を究む[illegible]の[illegible]の上手学の[illegible]べし

黴癘新書 鶴陵片倉元周先生著 全二冊

此書ハ古ヨリ難治ノ癩病ヲ先生燒針ヲ刺シ瘢猫ヲ以テ毒ヲ去ル事ヲ發明シ千古以来コレ無キ治術ヲ萬世ニ傳ルナリ又梅瘡ノ治法此書ヲ熟反覆シテ讀ヿキハ如何ナル難症ニテモ治セザルハナシ實ニ天下第一ノ奇書ナリ

傷寒啓微 同上 全三冊

此書ハ傷寒論ノ諸註家未ダ言ハザル所ノ奥義ヲ發キ瘟疫ト傷寒ト同病タルヲ辨明シ且傷寒金匱ニ書ノ方ニテ症ニ臨テ足ラザル所ノ治方ヲ唐宋以来ノ醫書ニ撰ヒ又經驗スル所ト己ノ新定十七方並ニ陣丸ノ方ヲアゲテ治療ノ助トス今治療スルニ其益甚多クシテ人ヲ濟フニ深切ナル書ナリ其新定スル所ノ諸方又点症ヲ發明スル杯ノ妙處ニイタリテハ實ニ仲景ノ羽翼ト謂ベシ

産科發蒙 鶴陵片倉元周先生著 全六冊

此書ハ妊娠中ノ諸症臨産ノ経驗治方ヲ悉ク擧ゲ且産論翼ノ備ハラザルヲ補ヒ萬古以来醫書ニコレナキ術ヲ發明シ又阿蘭陀難産ノ圖二十七ヲ翻譯シテ審ニ示シ且家秘ノ妙方ヲアラハシタレバ其治療ニ益アルヿ擧テ數フベカラズ醫ヲ業トスルモノ一日モ此書ナクンバアルベカラズ

靜儉堂治驗 同上 全五冊

此書ハ先生數十年來ノ治驗百中ノ一ヲシルシ置レタルヲ集メラレタルナリ病者ノ姓名住所前醫ノ治方又ハ自己ノ與ヘタル劑ノ効アル効ナキヲ包ムヿナクカヽレ又麻疹ノ經驗方肝症ノ治方並ニ弟子大森氏ノ治効十餘條ヲ記シ又衆醫ノ治スルヿ能ハザル奇疾ヲ治シタル等國字ヲ以テ書レタレバ實ニ後進有益ノ書ナリ

青嚢瑣探 鶴陵片倉元周先生著　全二冊

此書ハ先生ノ漫筆ニシテ人ノ戒トナリ又初學ニ學業ヲ勸メ人情ノ免レザル所ヲ記シ且奇効アル秘方並ニ甲斐ノ徳本ノ經驗十九方ノ主治藥方ヲ擧グ醫家ノ重寶ナル書ニシテ又俗家ニテモ是ヲ讀トキハ發憤シテ壯年ノ益トナルヿ多シ

三餘叢談 柳屋主人著　全一冊

皇朝の國史或ハ古記物語文筆に出るそら解しかたきをとくと詳ふ考究したる奇冊なり

東江先生書話　全三冊

我邦晉唐法書ニ根據シテ書學一變セルモノハ先生ヲ以テ祖師トナス此書ハ諸家隨筆中ヨリ古名人ノ墨蹟ニ關ルコヲ考索シテ學書ノ人ノ傳識ヲ資ク實ニ有用ノ珍編なり

瘍科秘録 棗軒本間先生著　全十冊

華岡翁ノ遺教ヲ述又先生ノ經驗ヲ明スル所ノ術ヲ加ヘ瘍科ノ治法ヲ論スル書ナリ初ニ病名ヲ正シ病因ヲ論ズ次ニ脉證ヲ説キ瘡瘍變正輕重死生等ヲ詳ニス終ニ禁方秘術ヲ載セ實ニ瘍科ノ全書ナリ此書ヲ熟讀シテ治療ヲ施スキハ起死回生ノ功ヲ立ル所ニ成ベシ

思貽齋管城二譜 廣澤先生著 文峯先生校　全一冊

此書ハ廣澤先生嘗テ和筆ノ製用ニ當ラス唐筆ノ善ニ及ハザルヲ憾ミ專ラ唐式ニ據リテ手ヅカラ細筆巨筆ヲ製造シ自ラ試ルヿ久クシテ其譜ヲ委ク録シ又各圖式ヲ作リテ遂ニ此ノ書ヲ著セリ洵ニ藝林ノ闕典ヲ補フ書ト云ベシ

道彦自書画三十六詞仙　全一冊

翁野さらし記行 成美大人抄　全一冊

翁四十一歳のとしの甲子吟行の文を白雄集に載せる畫圖子古人の評論とらす文藻の古歌等を雜記して古人を好む人の模楷とす [illegible]

歸正漫録 安井真祐先生書　全一冊

宋明名儒數輩ノ佛老ノ害ヲ論ゼシヲ諸書ヨリ撰纂シテ記シ異端ノ邪路ニ迷フ者ヲシテ正シキ儒道ニ歸リ入ラシム

書學大概 神通北海先生述　全一冊

此書ハ執筆ノ法ヲ正シ古人ノ論説ヲ餘サズ擧テ研究ナシ明ニ解シタレハ和漢古今書法ノ必用ナリ

五體雲淡帖 星池先生書 附釋文　全一帖

扇面清風帖 清人集書 星池先生校　全一帖

神道玉鉾の道草 跡部光海著　全一冊

官刻千禄字書 顔真卿書　全一冊

東坡大江東帖 草書　全一帖

米元章主家帖 行書　全一帖

趙子昂大湖帖 行書　全一帖

董其昌衆鳥帖 行書　全一帖

董其昌登龍帖 草書　全一帖

古今名蹟墨寶帖 正面　全一帖

上古三蹟ヨリ或ハ源平諸將以來ノ武家或ハ隱逸名臣僧家ニ名アル人ノ眞蹟ヲ刻シタレハ上古ヲシタフ君子ノ机上ニ必アルベキ書ナリ

玉屑帖　星池先生書　全一帖

和漢對照書札　初編 二編　全二冊
清朝ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書簡ニ翻譯シタレバ學問ノ一益ニシテ且ツ星池氏ノ書ノ遒美ナルヲ嘆賞スベシ

胸中山　全一冊
亀田鵬齋先生ノ画譜ナリ大儒ノ戯墨實ニ神出鬼没變幻ノ奇ヲキハム

農家調寶記　高井蘭山先生著　全三冊
此書ハ天地開け耕作する由来よりして百姓家においての日用萬般の勤方作物[illegible]地方検地ハ年貢収納[illegible]法律文證男女婚礼の式[illegible]の[illegible]をいくるまで[illegible]ばかりなく[illegible]農家の[illegible]べき[illegible]至宝なり

掌中書名便覽　折本　全一冊
上ハ六經ヨリ下ハ稗史ニ至ルマデ眞目ヲ掲ゲ一見シテ益アルヿ夥シ

大橋先生手簡　全一冊

蓮池堂任槐帖　全一冊

農家用文章大全　高井蘭山先生著　全一冊
用文章の書数多あれども[illegible]文の[illegible]風流の雅[illegible]此書ハ文章[illegible]耕作農具村役[illegible]耕作の[illegible]要用の文字を[illegible]文[illegible]幼童教育便利不朽の[illegible]用[illegible]

農家調寶記續録　大藏永常著　全一冊
一名豊稼録
此書ハ稲を刈て掛干にする仕方を記し[illegible]

農家調寶記附録　大藏永常著　全一冊
一名除蝗録
此書ハ田に蝗生じたる時油をもて[illegible]農家に[illegible]書なり

野總茗話　常盤潭北著　全五冊
此書ハもっぱら君臣父子夫婦の[illegible]儒佛の大旨[illegible]

秘傳重寶記　本西堂　折本
此書ハ痛大毒虫を[illegible]士農工商ともに[illegible]重宝有益の珍書なり

實語教童子教證註　振鷺亭先生著　全一冊

古状揃證註　高井蘭山翁著　全一冊

御成敗式目證註　同上　全一冊

此三書ハ我朝古代の遺書ニして牧童村婦といへども其名を知らざる者なし然といへども辺鄙僻邑にてハ其師を得て学ぶ事しバ其意を會得する事あたはずして故ニ蘭山振鷺二先生博く諸書を摘撫して其古事を論じ文意を解し文字の正を知らしめんが為に其字を以て之より出し或ハ注して正字を更へて其傍に仮字を附し ただハ児童幼女をしていろは四十七音を知れバ師傳を得ずして瞭然と其意味を會へ自ら身を脩るの基本となるべし

實語教童子教　頭書無點　全一冊

長雄書札文集　船田耕山書　全一冊

頭書通俗用文章　全一冊

墨河八景帖　御家攀雲堂書　全一冊

長雄女今川　全一冊

陰陽新撰八卦鈔　全一冊

挿花圖式　全三冊

日本國郡附　両面一紙

古錢鑑價附　全一冊

泰平年代記　全一冊

古状揃萬寳藏　頭書無點　全一冊

朝川鼎藏梓

弘化二年乙巳十二月

書林　横山町三丁目　和泉屋金右衛門